

大阪の企業とスポーツ

—大阪人を「野球」好きにした企業と企業家たち—

前阪 恵造

【目的】

「野球」は「相撲」について第二の国技といわれるほど、親しまれているスポーツ。熱狂的な応援で知られるプロ野球の阪神タイガース、高校球児の聖地である甲子園球場などを控え、大阪は「野球王国」「野球どころ」といわれる。なぜ、大阪人は「野球」が好きなのか。野球発展の歴史を繙くと、明治の「野球」普及期や昭和初期のプロ野球球団誕生期、戦後の復興期に大阪の企業や企業家関わってきた。

本研究では、「野球」の普及期やプロ野球球団誕生とその変遷を通して、大阪人を「野球」好きにした企業と企業家たちの野球との関わりについて振り返る。

社会人野球も野球の発展に関わってきたが、今回は時間の都合もあり、次の機会に触れたい。

【内容】

明治5年、お雇い外国人ホーレス・ウィルソンが教壇で教える傍ら生徒に野球を教えたのがはじまりとされ、明治期は学生野球を中心に野球が発展した。慶応義塾大学体育会野球部と早稲田大学野球部の伝統の「早慶戦」が生まれたのもこの頃である。明治39年、当時、三井銀行に勤めていた小林一三は「早慶戦」観戦の感想を「是程面白いものは又と世界にあるまい」と日記に残している。

朝日新聞社主催、夏の高校野球は、大正4年に豊中グラウンドから始まった。この大会は箕面有馬電気軌道(阪急電鉄)が大阪朝日新聞社に開催を薦めたもの。小林一三は職業野球への関心も高く、日本で初めての職業野球チーム、日本運動協会が関東大震災で解散すると受け皿となる宝塚運動協会を設立。この球団も昭和恐慌を受け、解散を余儀なくされたが、後年、阪急がプロ野球経営に乗り出す礎となった。

昭和9年、大日本東京野球倶楽部(読売ジャイアンツ)、昭和10年 大阪タイガース(阪神タイガース)、昭和11年 大阪阪急野球協会(阪急ブレーブス)が設立され、新聞社4チーム、鉄道会社3チームの7チームでプロ野球がスタート。昭和13年、阪急・阪神の薦めで南海が加わり、戦後、昭和24年 近鉄もプロ野球経営に興味を示し、球団を設立した。

企業のステイタスと広告塔の役目を果たしてきたプロ野球球団も、時代の変化とともに球団を持つべき企業の業種が変わってきた。新聞社や鉄道会社から金融やIT企業などが増えた。また、球団譲渡とともに地方に分散することとなり、プロ野球の広域化と地域密着化が進むことになった。

【結果】・野球の発展に関わった大阪の企業、企業家、職業野球誕生と企業家

- ・経営環境の変化とプロ野球球団保有企業の変遷
- ・野球殿堂入りした大阪の企業家、野球の聖地を巡る街あるき

データでみる、大阪人は野球好き、大阪は「野球王国」

ソニー生命保険(株)が、平成27年11月9日～11月16日の8日間、全国の20歳～59歳の男女に対し、「生活意識調査」をインターネットリサーチで実施した(2,350名の有効サンプルの集計結果)。

特定のスポーツが盛んな都道府県を○○(スポーツ名)王国と表現することがある。国内の2大プロスポーツである野球とサッカー、そして、平成27年注目を集めたラグビーについて、全回答者(2,350名)に、どこが○○王国だと思うか聞いたもの。

◆「野球王国だと思う」都道府県【単一回答】 ◆「サッカー王国だと思う」都道府県【単一回答】 ◆「ラグビー王国だと思う」都道府県【単一回答】
全体[n=2350] ※上位10都道府県表示 全体[n=2350] ※上位10都道府県表示 全体[n=2350] ※上位10都道府県表示

	都道府県	%
1位	大阪府	20.9
2位	東京都	13.9
3位	神奈川県	8.4
4位	広島県	4.5
5位	福岡県	4.2
6位	北海道	3.7
7位	兵庫県	3.6
8位	宮城県	2.9
9位	愛知県	1.9
10位	愛媛県	1.5

	都道府県	%
1位	静岡県	41.3
2位	千葉県	6.0
3位	東京都	5.9
4位	埼玉県	5.3
5位	神奈川県	5.2
6位	大阪府	2.1
7位	広島県	1.3
8位	北海道	1.1
9位	茨城県	0.9
10位	青森県	0.8

	都道府県	%
1位	大阪府	12.2
2位	東京都	11.3
3位	福岡県	3.9
4位	岩手県	3.0
5位	神奈川県	2.7
	静岡県	2.7
7位	京都府	2.5
8位	埼玉県	1.9
9位	北海道	1.7
10位	兵庫県	1.6

野球王国の1位は「大阪府」(20.9%)、2位「東京都」(13.9%)、3位「神奈川県」(8.4%)、4位「広島県」(4.5%)、5位「福岡県」(4.2%)など、9位の「愛知県」(1.9%)までは、プロ野球球団(NPB)の本拠地がある都道府県となっている。

大阪はプロ野球出身者が断トツの1位

令和元年 都道府県別プロ野球選手出身地ランキングを見ると、1位は圧倒的91人の大阪で、2位は神奈川65人、3位福岡57人と続く。東京は54人で4位。1球団の支配下選手は70名なので、大阪出身者だけで1球団できることになる。プロ野球出身者数が多いことは野球が盛んで、アマチュアのレベルが高いことを表している。

[都道府県別 プロ野球選手出身地ランキング]

1位	大阪	91人
2位	神奈川	65人
3位	福岡	57人
4位	東京	54人
5位	兵庫	53人
6位	千葉	41人
7位	愛知	38人
8位	埼玉	36人
9位	沖縄	35人
10位	広島	32人

プロ野球選手
1球団70名×12球団
840名

高校野球の優勝回数が多い大阪-大阪球児の野球レベルは高い

全国高等学校野球選手権大会優勝回数14回

選抜高等学校野球大会優勝回数11回

28回昭和21年	浪華商	西宮球場
43回昭和36年	浪商	昭和34年校名変更 尾崎行雄
45回昭和38年	明星	甲子園西宮併催
50回昭和43年	興国	初出場初優勝
60回昭和53年	PL学園	逆転のPL
65回昭和58年	PL学園	桑田真澄
67回昭和60年	PL学園	桑田真澄
69回昭和62年	PL学園	野村弘樹
73回平成3年	大阪桐蔭	初出場初優勝 創部4年目
90回平成20年	大阪桐蔭	17-0最多得点
94回平成24年	大阪桐蔭	藤浪晋太郎
96回平成26年	大阪桐蔭	
100回平成30年	大阪桐蔭	柿木蓮
101回令和元年	履正社	

14回昭和12年	浪華商	
21回昭和24年	北野	唯一の 公立校
27回昭和30年	浪華商	
53回昭和56年	PL学園	
54回昭和57年	PL学園	
59回昭和62年	PL学園	
62回平成2年	近大付	
65回平成5年	上宮	
84回平成12年	大阪桐蔭	
89回平成29年	大阪桐蔭	大阪決戦
90回平成30年	大阪桐蔭	

愛知(11回)、兵庫・神奈川(6回)

春夏連覇

昭和62年PL学園
平成24年大阪桐蔭
平成30年大阪桐蔭

春連覇

昭和56-57年PL学園
平成29-30年大阪桐蔭

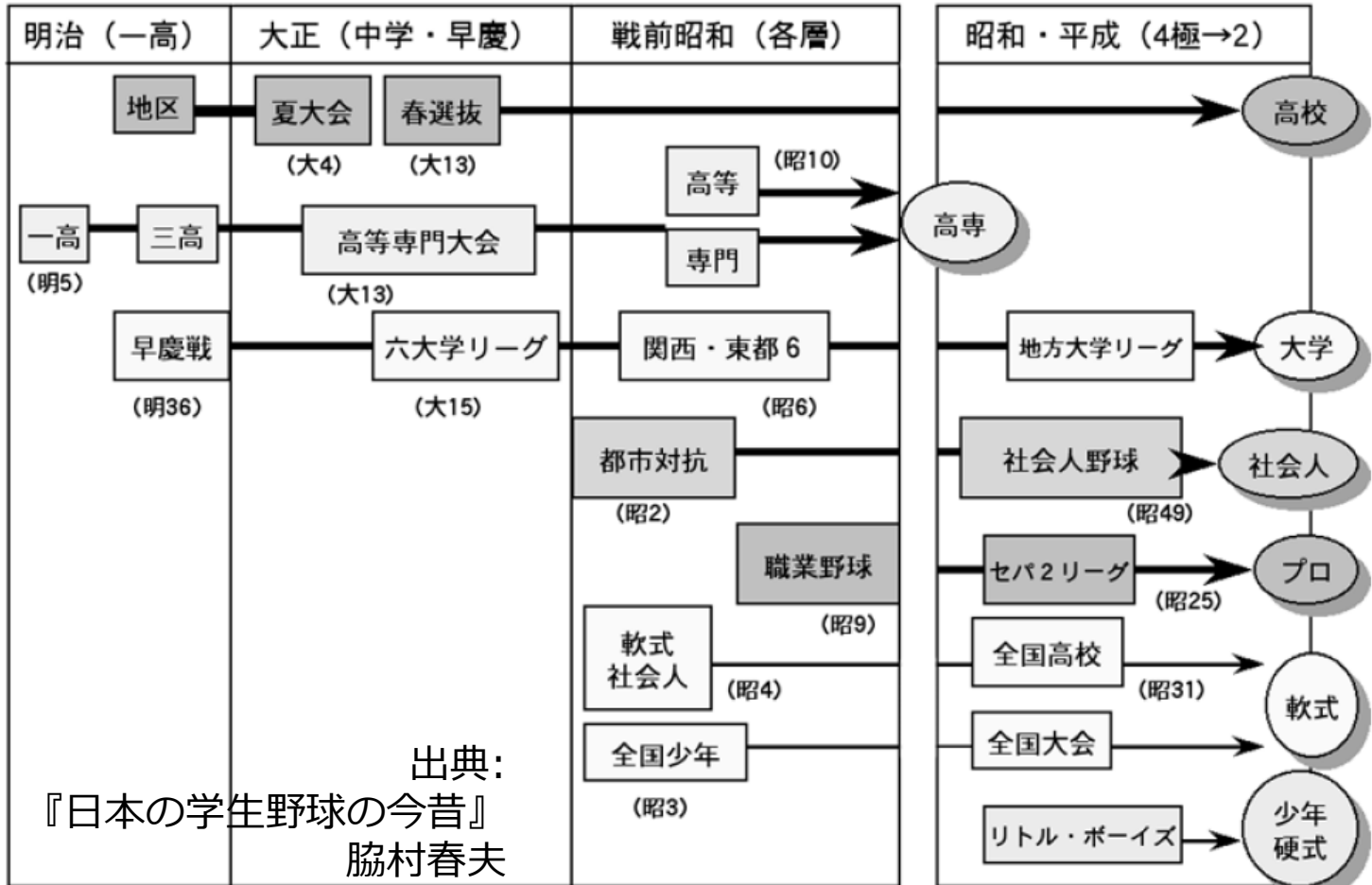
愛知(8回)、和歌山・広島・東京・兵庫・神奈川(7回)

野球は学生野球から広がった

「午後から三田(慶応運動場)にゆく 慶応と早稲田とベースボールの競技を見に 中々盛大で秩序アルには驚いた 見るもので芝居と言はず角力と言はず是程面白いものは又と世界にあるまい、慶応の○、早稲田三点で三田が負けたが残念だ」

『小林一三日記』 明治39年11月3日から抜粋

日本の野球の発展の流れ
(各層への拡大、エリート層から庶民層へ)



出典:
『日本の学生野球の今昔』
脇村春夫

全国高等学校野球選手権大会は大阪・豊中運動場から始まった

大正2年、豊中運動場を開設した箕面有馬電気軌道は、大阪朝日新聞社に全国の中等学校野球大会を提案、全国中等学校優勝野球大会が始まった。テント張りの数百人程度の観覧席が、婦人観覧席として設けられた。

豊中運動場では、学生野球のほか、社会人野球、大阪毎日新聞社主催の陸上競技大会やラグビーフットボール大会も開催されている。

かつての豊中運動場北側には「高校野球発祥の地記念公園」が整備されており、歴代優勝校・準優勝校の名前がプレートに刻まれている。

大正4年
8月22日 10校参加
豊中運動場
(第1～2回)



→鳴尾球場 大正6年

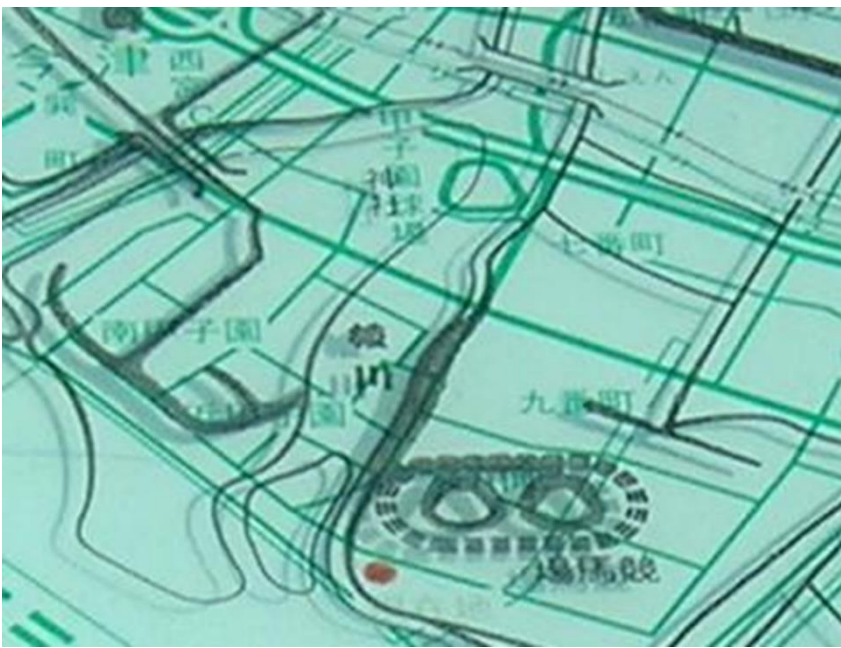
第3回～第9回

全国中等学校優勝野球大会は人気を集めたが、豊中運動場では1面しか野球場が取れなかった。

阪神電気鉄道が鳴尾競馬場の中に2面の野球場を開設し、第3回大会から鳴尾球場で開催された。

しかし、観客スタンドは木製で収容人数も少なく、本格的な野球場の建設が求められた。

鳴尾球場跡 浜甲子園運動公園



→甲子園球場(大正13年 第10回～)
第28回は西宮球場、第45回大会は甲子園球場と西宮球場と2会場で開催

大阪朝日新聞社からの要請を受け、阪神電気鉄道は大正13年、本格的な野球場、甲子園大運動場を開設した。第10回大会から、戦時中の中止や戦後のGHQ接收を除き、高校野球は甲子園球場で開催されている。



平成6年8月に朝日新聞社・毎日新聞社・高野連が甲子園球場70周年を記念して建てた「甲子園大運動場」碑

高校野球発祥の地

(山本球場跡)

名古屋市昭和区

大阪毎日新聞社が主催する選抜高校野球の記念すべき第1回大会は、名古屋市の「山本球場」で開催された。第2回大会から、甲子園球場に場所を移し、現在に至っている。



大阪毎日新聞社は、豊野町(寝屋川市)に広大な運動場を持つ京阪電気鉄道に、甲子園大運動場に負けないような本格的な野球場の建設を打診した。しかし、当時、新京阪電気鉄道の建設等に多額の投資をしていた京阪は建設を断念した。

寝屋川球場跡 寝屋川市豊野町

職業野球の誕生から、在阪四球団誕生へ

明治5年**ホーレス・ウィルソン**が、当時の第一大学区第一番中学(東京大学の前身の学校)で生徒に「**ベースボール**」を教えた。

明治11年**平岡瀨(ひろし)**が新橋停車場内に日本初の球場をつくり、日本初の本格的野球チーム「**新橋アスレチック倶楽部**」を設立。

大学や企業で野球チームが結成される→
早稲田大学/慶応義塾大学/阪神電鉄野球部/大阪毎日野球団

「運動場を持つ鉄道会社、たとえば東京ならば、京成電車、東横電車、関西ならば、阪神の甲子園、阪急の宝塚、京阪の寝屋川、大阪鉄道の何とかいう運動場(*藤井寺)等立派な野球場を持つ是等の鉄道会社が各会社専属の運動場にて、毎年春秋二期にリーグ戦を決行する、そうして優勝旗の競争をする、斯くすることによって各電鉄会社は相当の乗客収入と入場料と得るのであるから、野球団の経営費を支出し得て、或は余剰があるかもしれない。」小林一三『**私の生き方**』「職業野球団打診」から引用

大正5年、小林一三は、豊中運動場で冬季練習をしていた早稲田大学野球部の指導者、河野安通志に日本での職業野球の可能性について打診した→河野は**時期尚早**と答えた。

大正9年河野安通志が日本初のプロ野球チーム、**日本運動協会**(芝浦協会)設立。

大正12年**関東大震災**の影響で芝浦球場が使えなくなり、日本運動協会解散。

大正13年解散した日本運動協会を継承する形で、小林一三は**宝塚運動協会**設立。

昭和金融恐慌後続くプロ球団がでなかった/阪急は協会の維持に年間3万円を負担
大阪毎日野球団が経営不振で解散/宝塚運動協会 昭和4年7月31日解散

昭和6年、9年に読売新聞社が大リーグから選手を招致、日米野球を開催
日本でもプロ野球という動きが高まる

昭和9年12月に**大日本東京野球倶楽部**(読売ジャイアンツ)が結成。
(昭和11年 東京巨人軍に改称)

読売新聞社は、数球団で職業野球リーグを結成したいと考えていた
特に東京市・大阪市・名古屋市の三大都市圏で試合を行うことを目指していた

昭和10年12月10日に商号「株式会社大阪野球倶楽部」、球団名**大阪タイガース**が発足。

大日本東京野球倶楽部を結成したのを受け、小林一三はアメリカに出張中にワシントン
から電報で球団設立を指示し、昭和11年1月23日に**大阪阪急野球協会**が設立。

昭和11年2月5日、大日本東京野球倶楽部、大阪タイガースの2球団を始め、名古屋軍
(新愛知新聞社)、東京セネターズ(西武鉄道)、阪急軍(阪急電鉄)、大東京軍(国民新聞
社)、名古屋金鯱軍(名古屋新聞社)の7球団で**日本職業野球連盟**が設立、4月に第1回の
リーグ戦が開催。

新聞社4チーム、鉄道会社3チームで、プロ野球がスタート

昭和13年3月1日南海鉄道は**南海軍**(南海野球株式会社)を結成。
阪神電気鉄道、阪神急行電鉄(阪急)に続く3番目のプロ野球球団となった。阪神の細野
躋(のぼる)や阪急の小林一三が南海の寺田甚吉社長と小原英一取締役役に設立を勧め、寺
田のツルの一声で決まったとされている。

昭和24年、近畿日本鉄道をスポンサーとする**近鉄パールス**を結成。近鉄は大阪電気軌
道時代よりラグビー部を有していたが、後の**佐伯勇**の述懐によれば「ラグビーでは儲か
らないから」と当時隆盛を極めていた野球経営に食指を動かしたという。

経営環境の変化とプロ野球球団保有企業の変遷

昭和25年の球団保有企業は、鉄道会社7社、新聞社4社、映画会社2社。当時の時代背景としては、戦後の復興時期であり、インフラ整備の中心として鉄道業界は右肩上がりの時代。さらに、球団を保有し、沿線にある球場で試合を行うことで鉄道の業績アップにもつなげる狙いもあった。

この年から、毎日新聞社の参入により、セ・パの2リーグ制となった。

[昭和25年]-2リーグ15球団

鉄道:7社

(パリーグは7球団中5球団)

新聞社4社

映画会社:2社

水産:1社

市民球団:1社(広島カープ)

セ・リーグ-8球団

松竹ロビンス(松竹)

中日ドラゴンズ(**中日新聞**)

読売ジャイアンツ(**読売新聞**)

大阪タイガース(**阪神電気鉄道**)

大洋ホエールズ(大洋漁業)

西日本パイレーツ(**西日本新聞**)

国鉄スワローズ(**国鉄**)

広島カープ

パ・リーグ-7球団

毎日オリオンズ(**毎日新聞**)

南海ホークス(**南海電気鉄道**)

大映スターズ(大映)

阪急ブレーブス(**京阪神急行電鉄**)

西鉄クリッパース(**西日本鉄道**)

東急フライヤーズ(**東京急行電鉄**)

近鉄パールズ(**近畿日本鉄道**)

現在のプロ野球球団保有企業を見ると、鉄道会社2社、新聞社2社となり、変ってITや携帯、リースなど半世紀前にはなかった業種の企業が見られる。

[令和2年]-2リーグ12球団(昭和33~)

食品関係:1社→3社

鉄道:7社→2社

新聞社4社→2社

IT企業:3社

金融:1社

市民球団:1社(広島東洋カープ)

昭和25年2リーグ発足時と
保有会社が同じ球団

中日・読売・阪神・広島

セ・リーグ

中日ドラゴンズ(中日新聞)

読売ジャイアンツ(読売新聞)

阪神タイガース(阪神電気鉄道)

横浜DeNA ベイスターズ(DeNA)

東京ヤクルトスワローズ(ヤクルト)

広島東洋カープ

パ・リーグ

千葉ロッテマリーンズ(ロッテ)

福岡ソフトバンクホークス(ソフトバンク)

オリックスバファローズ(オリックス)

埼玉西武ライオンズ(西武)

北海道日本ハムファイターズ(日本ハム)

東北楽天ゴールデンイーグルス(楽天)

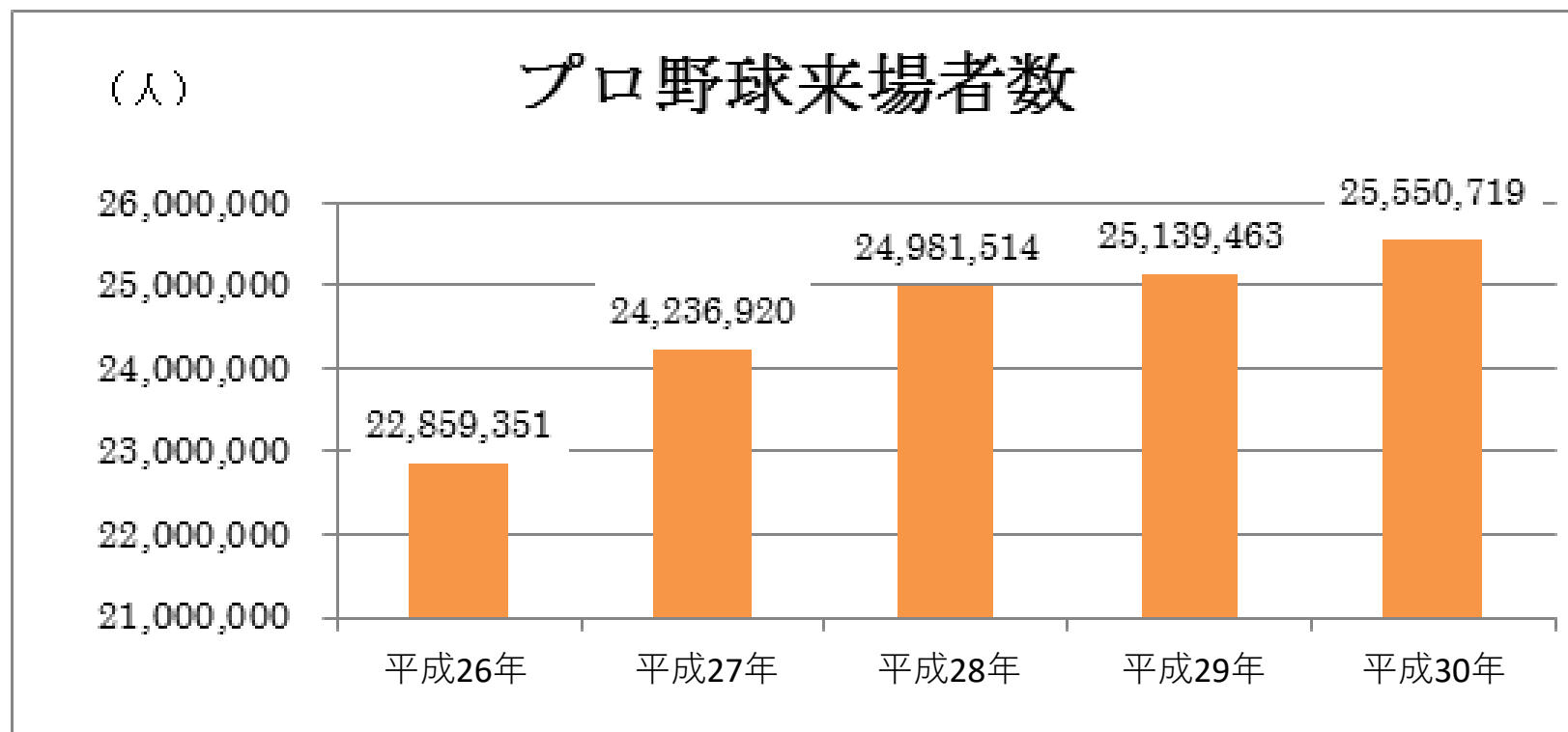
*パ・リーグは保有企業がすべて入れ替わった

かつてプロ野球のシーズンが始まると、月曜日の移動日以外は毎日テレビで中継が行われるのが普通だった。今、地上波ではプロ野球の中継はされていないが、人気はなくなっただけではない。

地上波のテレビ中継の場合はプロ野球中継をやっていても、好きな球団の中継をいつもやっているとは限らない。BSチャンネルやスポーツ専用チャンネルの登場により、自分が応援している球団をいつでも見ることができるようになった。

一時期、プロ野球の来場者数は低迷した時期も見られたが、プロ野球全体での観客数は増加している。特に、パ・リーグの増加が著しい。

また、1試合当たりの平均観客数も3万人を超え、これは米リーグの1試合平均観客数より多くなっている。



【参照】一般社団法人日本野球機構のサイトより引用

消えゆく球場

大阪スタジアム(昭和25-平成10)
→なんばパークス

球団保有企業の変化と共に球団の地方移転がおこなわれ、かつて本拠地だった球場は使われなくなり、商業施設、学校、住宅などの都市施設に姿を変えていった。

大阪スタジアムは複合施設なんばパークスに変わり、パークスガーデンには、南海ホークスに在籍した元選手をはじめ大阪スタジアムにゆかりの深い人達の手形モニュメントが残されている。南海ホークスメモリアルギャラリーにはホークスの活躍を追想する、優勝カップやトロフィー、賞状などが展示されている。



藤井寺球場(昭和3-平成17)→四天王寺学園・分譲マンション

彫刻家:玉野勢三 白球の夢

昭和3年 大阪鉄道が建設した「藤井寺球場」。近鉄バファローズの本拠地として使われたが、球場跡は学校と分譲マンションになり、その跡に記念碑「白球の夢」が立てられている。

昭和25年に誕生した「日本生命球場」は学生や社会人野球の聖地として、また近鉄バファローズの準本拠地として親しまれた。収容人数2万500人と少ないことから、この球場での日本シリーズ開催はなかった。老朽化で平成9年に閉鎖、取壊され、商業施設になった。



日本生命球場(昭和25-平成9)
→もりのみやキューズモールBASE



阪急西宮球場(昭和12-平成14)
→西宮ガーデンズ西宮ギャラリー

阪急ブレーブスの本拠地として、昭和12年に完成した本格的な球場だった。ブレーブスがオリエンツ・リースに売却された後は、西宮スタジアムと改称され、様々なスポーツやイベントに使われた。

平成14年に閉場、解体され、商業施設、西宮ガーデンとなった。ガーデンズの西宮ギャラリーにはブレーブスの優勝旗やカップ、西宮球場のジオラマが展示されている。



野球殿堂(特別表彰)入りした大阪の企業家たち

東京ドームに併設された「野球殿堂博物館」には野球の発展に寄与した人物の功績をたたえ顕彰している。大阪から8人の企業家が野球殿堂入りしている。

阪急電鉄

- ***小林一三**…宝塚野球協会、阪急野球団を結成した実業家
- 村上 實** …小林一三オーナーの命を受け阪急球団創設
パリーグ理事長、能勢電軌元社長、会長

阪神電気鉄道

- 野田誠三**…甲子園球場の設計工事を監督した功労者、元社長、会長

近畿日本鉄道

- ***佐伯勇**… 野球をこよなく愛し近鉄オーナーを36年務めた

田村駒

- 田村駒治郎**…セ・リーグ初代王者の名物オーナー(松竹ロビンス)

日本ハム

- ***大社義規**…野球とチームを愛した日本ハム初代オーナー

ミスノ

- ***水野利八**…美津濃商店を創立し、用具の生産・改良に尽力

朝日新聞社

- ***村山龍平**…全国中等学校優勝野球大会を創設

*大阪企業家ミュージアムの105人の企業家のうち、野球殿堂入りしている企業家が5名いる。

球団を保有していた大阪の4つの鉄道会社のうち、南海電気鉄道だけが戦前から球団を持っていたにもかかわらず、企業家が野球殿堂入りしていない。

元南海ホークスのファンの皆さん、「今日のパリーグ、いや今日の日本のプロ野球を牽引していると言っている、ソフトバンクホークスがあるのは、かつての南海ホークスがあってこそ」、ということ胸を張って言って欲しい。

野球の聖地を巡る街あるき

かつて名勝負がおこなわれた球場跡や球史に残る聖地を懐かしみ、訪ねる野球ファンも多い。

各地に残る野球場跡地やゆかりの場所に顕彰碑やモニュメント、説明板を整備して、聖地を廻る「**野球の聖地を巡る街あるき**」を提案してはどうだろうか。

野球ファンにとどまらず、住んでいる街の歴史を見直したり、街おこしの契機になるのではないかと思う。

- **香櫨園運動場**(明治43-大正2)-関西初の国際試合開催。阪神電気鉄道と野球との初めての出会い
- **豊中運動場**(大正2-大正10)-高校野球発祥の地(夏の選手権1~2回)、高校ラグビーフットボール大会発祥の地、高校野球発祥の地記念公園
- **鳴尾運動場**(大正5-大正13)-鳴尾競馬場に作られた高校野球の聖地(夏の選手権3~9回)
- **寝屋川球場**(大正11-昭和17)-京阪運動場、中等野球大阪大会、選抜野球開催球場候補地
- **宝塚球場**(大正11-昭和12)-関西初のプロ野球チーム宝塚運動協会、阪急ブレーブスの初試合、初期の本拠地
- **甲子園球場**(大正13-)-高校野球の聖地(春・夏)、阪神タイガース本拠地、甲子園歴史館
- **藤井寺球場**(昭和3-平成17)-近鉄バファローズの本拠地
- **西京極球場**(昭和7-)-松竹ロビンス・近鉄バファローズ・阪急ブレーブスの準本拠地、京都野球殿堂
- **堺大浜球場**(昭和9-)-初期の南海ホークス本拠地
- **西宮球場**(昭和12-平成14)-阪急ブレーブスの本拠地、阪急ギャラリー
- **中百舌鳥球場**(昭和14-平成13)-初期の南海ホークスの本拠地、二軍練習場
- **衣笠球場**(昭和23-昭和44)-立命館大学野球部の専用球場。松竹ロビンス・洋松ロビンスの本拠地
- **大阪スタジアム**(昭和25-平成10)-南海ホークスの本拠地、南海ホークスメモリアルギャラリー
- **日生球場**(昭和25-平成9)-アマチュア野球・社会人野球の聖地、近鉄バファローズ準本拠地
- **京セラドーム大阪**(平成9-)-オリックス・バファローズの本拠地、大阪ガスの工場跡地

○:顕彰碑や説明板のある施設や球場跡